

作品名：《いのちの起源（A-1）》 2015年 Ø 155cm

2014年、国立天文台野辺山の4.5m電波望遠鏡によって、アミノ酸の基になるメチルアミンが、星形成領域の宇宙空間で、大量に存在している事が見つかった。アミノ酸は生命の存在に欠かせない物質である。はたして生命の誕生と、星の誕生にはどのような関係があるのだろうか？その答えを探求する事が今回のレジデンスの目的であった。初夏の野辺山の景色は牧歌的で、雰囲気は平和的である。そして空には広い宇宙がある。空想すれば、そこには宇宙空間で単体で生きられる生命が存在するかも知れないし、代謝、自己複製する星があるかも知れない。科学者が電波によって観測した宇宙は、モノクロの画像を分かりやすいように着色して伝えられる。その方法に国際的なルールがあるわけではなく、科学者間のいくつかの共通認識によって、1枚の写真の中で、どの波長の電波をどの色にするかが決められている。今回はこのプロセスを作品に反映させた。またレジデンスの対話の中で、宇宙の全体像についての話にもなった。そこから、ポアンカレのいう三次元球面のように、宇宙を、直進するとまた元の場所に戻ってくるような閉じた系（球）だと仮定すると、空間の歪みに左右されない直線を作り出す事が出来れば、理論的にはその宇宙の外の次元に出る事が出来るだろうというアイデアも生まれた。宇宙といのちは1つのものなので、いのちとは何か？を考える時、宇宙の全体像を把握する事は重要だ。たとえそのイメージが不完全だとしてもである。

#### プロフィール

1980年浜松市生まれ。父は洋画家の青島三郎（1937-2001）。絵画、彫刻、コンセプチュアルアート、舞台美術、絵本など多様な表現手段で、文明が自然と調和するための方法を探る。確かな技術によるクオリティーの高い作品に定評がある。特に石彫による『葉っぱ』は、故宮博物院の『翠玉白菜』に並ぶ名宝と言われることがある。近年の若山美術館の個展では、絵本の余白と美術館の空間を、融合させたコンセプチュアルなインスタレーションを展開した。石彫の『葉っぱ』を発表（2005年、市田邸／東京）。「日韓現代美術交流展」出品（2007年 BankART Studio NYK／横浜、2008年 Moran Gallery／ソウル）。「原始感覚美術祭」出品（2010年～2015年、長野）。イマージュオペラ>>ミトロジック<<「古の夜々の月」の舞台美術を担当（2010年、浜松城、文化庁助成）。インターネット上で『©Earth』を発表（2012年）。「ほわほわ展」（2014年、若山美術館／東京）。「食とアートの廻廊」出品（2014年、長野）。著作『おつきさますーやすや』（2008年）、『ほわほわ』（2013年）（共に福音館書店）。大町市在住。

作品名 《3×1+》

この作品は一見、宇宙や天体の動きを再現したかのようですが、実際には何かを表している訳ではありません。人にとって最大の体験は何か。それが作品の目指すものです。そしてその可能性を探ることは人間の知覚の限界を探ることに繋がっています。

私は山岳や洞窟、建築などの空間に関するフィールドワークを行い、空間と時間、そして光と闇が体性感覚に与える影響を探っています。ここではその体験を基に、要素を極限まで削ぎ落とし、空間を構成しています。それが宇宙のイメージに似ることは、宇宙をみるマクロ的視点は具体的な事象を削ぎ落とした眼によるものだということを示しています。

また作り手は制作の中で、時に殆ど全ての労力を手仕事の痕跡を消すことに費やします(※1)。イメージのみを伝えるために、もともとそこにあったかのようにみせるために。つまりそこには、手の跡が消えているものほど手がかかっている、という矛盾があります。近づいて良く目を凝らせば、そこに手の痕跡が見つかるかもしれません。それは遠い星を眺め、そこに生命の存在を想像する視点と、どこか似てはいないでしょうか。

また、何も表していない点においても、この作品は宇宙と似ているでしょう。ここで言う宇宙とは、大気圏の上の空間のことではなく、自ら然る存在-自然のことを指します。自然は何も表さないがゆえに、何も求めないがゆえに、人の介入を無限に許容します。私は人でありながら自然に近いものを作りたいと考えています。人が擬似的に自然を作ることには意味があるのでしょうか。人がその内部にある、自然の一部(※2)としての力を発揮しているとき、人はその人の内部に宇宙に触れたときのような感動をみるのだと思います。

※1、極小の作業の集積によって、全体が構成されていることも宇宙の構造に通じるものがあるのかも知れません。

※2、人体を構成する部品は星の内部で生まれたものです。

プロフィール

武蔵野美術大学建築学科専攻。高所登山やケービングなどのフィールドワークを行い、「空間の知覚」と「体性感覚の変容」をテーマに空間を実体化するインスタレーション作品を制作。2015年 Arte Laguna Prize Finalist(ヴェネツィア)/Aichi arts challenge 入賞、2014年 Smart illumination 横浜 観客賞/食とアートの回廊(信濃大町)/Teleceptor(東京)、2013 千田泰広インスタレーション展 KNAM(軽井沢)、2010 文化体験プログラム展(豊科近代美術館)、2009 神戸ビエンナーレ国際コンペティション入賞。他、受賞、個展、舞台美術等。10/31-11/16「宇宙芸術祭」種子島に参加。現在長野県の山林5haの敷地に、アートパークを建設中。 <http://www.chidayasuhiro.com/>

前沢知子 AIR 野辺山参加

## 作品キャプション

組替え絵画 2015—共存／境存

ワークショップで出来た素材で制作      ワorkshop協力：東京造形大学、信州大学

『もはや日常の至る所に、そして個々の中に、宗教／宇宙は存在している』

長野県野辺山にある国立天文台で、「見えないけれど、日常の至る所に存在にしている電波」があふれる静寂した空間で、この言葉を思い出し、自分の作品と重なりました。「個々の中に、存在している宗教／宇宙」とは、「個々の価値観」です。

出品作品の「組替え絵画」シリーズでは、ワークショップ参加者の行為が軸となっています。作品制作を目的としないワークショップで出来た素材を、トリミングカットなど最小限の制作で作品として仕上げ、空間に合わせて展示しています。ワークショップの内容は、床一面に敷き詰められた巨大な綿布（紙）の上で、参加者が全身で絵具体験（遊び）を行うというものです。制作方法としてワークショップを取り入れている理由は、作品となる綿布（紙）に、偶然できる絵具の痕跡（残物）を作るためです。天地左右など絵画的制作を意識しえない広さの綿布（紙）を床に敷き詰め、その上で不特定多数の参加者が、全身で絵具体験／遊びをします。そして、それらの綿布や紙（痕跡）をトリミングカットなどの最小限の作業で、作品を制作します。ここでは参加者が不特定多数であるため、個（作者）が意味を持ちません。

このようなワークショップで残された素材は、単なる偶然の痕跡（残物）です。そこからトリミングカットなどの作業を通して、作家によって「何か」が拾い上げられます。拾い上げた「何か」は、作品として仕立てられ、空間において展示という位置を持った時、再び鑑賞者／参加者によって「個々の何か」として見いだされ、意味が生まれます。「あると思えば／意識すれば、至る所に存在している」。個々の価値観を通して立ち表れてくるもの。それが作品を通して私が伝えたいことです。

## プロフィール

1972年長野県飯田市生まれ。1997年東京造形大学卒業。2015年横浜国立大学大学院在籍中。2000年ダイムラー・クライスラー・グループ「アート・スコープ2000」受賞。2001年東京造形大学校友会留学奨学金授与。2008年～美術から子育てを学ぶ会主宰（2008、2014、2015年世田谷子ども基金授与）。台湾、仏、フィンランドなど国内外で滞在制作。美術から子育てを学ぶ会会長。東京造形大学非常勤講師など務め、前沢知子スタジオ代表。<http://www.tomokomaezawa.com/>

主な展覧会：「恵比寿映像祭」東京都写真美術館、「VOCA展2012年」上野の森美術館、「現代写真の動向2001outer⇄inter」川崎市市民ミュージアム、国立国際美術館、松本市美術館、水戸芸術館、府中市美術館、東京オペラシティアートギャラリー、台湾、仏、独他多数。

主なワークショップ：飯田市美術博物館、世田谷美術館、目黒区美術館、東京造形大学、児童館、保育園、図書館他多数

主な執筆：『アートから広がる可能性-美術と子育てと地域』、『写真ぬりえ』など

所蔵作品：ダイムラー・クライスラー日本ホールディング株式会社、ドイツ銀行、和歌山県立近代美術館

## 作品キャプション

《星空ピクニック》 2015年

《UF0探しています》2014年

子供の頃、様々なレンズを組み合わせて天体望遠鏡を作った。月のクレーターが見えた時、大変興奮したのを今でも覚えている。子供でもできる簡単な方法（つまり望遠鏡）で、普段見えないものが見えるということが非常に面白く感じた。

今私は美術作家として都市空間に興味を持ち制作している。都市への新しい認識、生き生きとした都市と人との関係、楽しい街の使い方を美術的手法を使い発見、提示したいと考え活動している。

都市の中に確実に存在しているが見逃しているもの、その存在があるにもかかわらず意識しないものを見つけ出すことが制作の出発点となっている。子供頃も今もそう違うことはしていないのかもしれない。本作品では、普段私たちの真上にありながら、その存在をあまり意識しない宇宙の観察と、ピクニックという野外活動の形式を組み合わせ作品化した。

闇の中に身を置き静かに宇宙を感じる。そのための装置としてのピクニックマットを制作し、「星空ピクニック」を実行した。ピクニックという言葉は19世紀初頭からイギリスで広く使われ始めたそうである。美味しい飲み物を頂きながら、存分に宇宙を感じ、時には近くの人とおしゃべりをする。そんな気軽な宇宙との関係を提案したいと考え制作した。

ワークショップでは、虫眼鏡を使ったカメラオブスキュラを制作し身近な世界をちょっと普段とは違った方法で観察した。像は反転し、スクリーンに映され映像化した世界は新鮮に感じる。

私達は世界のことを知らないと思う。現在は科学が発達し、遠隔地の情報もタイムラグなく得ることも可能だ。だが例えば、2時間かけ手のデッサンを描く時、2時間手についての発見は続くだろう。（こんな風に指紋があるのかとか、深さの違う幾つものシワや骨や腱、筋肉の存在など。）何年も片時離れることなく存在し続ける自分の手のことでさえ私達はあまりよく知らない。

世界は謎に満ちている。それぞれの方法、それぞれの見方で世界を感じる。そんな世界との接し方も許容されて良いのではないだろうか。

## プロフィール

1974 岡山県生まれ

2002 倉敷芸術科学大学大学院修士課程修了

## 展覧会歴

2002 個展 Deleting Project (アクシスギャラリー アネックス/東京都港区六本木)

選選展 / 0ギャラリー (東京都中央区銀座)

2004 トロールの森 / 善福寺公園 (東京都杉並区)

個展 SPIRAL / appel (東京都世田谷区)

2005 個展 散歩プロジェクト-F00TSTEP- / 遊工房アートスペース (東京都杉並区)

2006 exota / KUNSTHAL ROTTERDAM(オランダ ロッテルダム)

2011 個展 Interface / Kulttuuri bingo (オウル フィンランド)

2013 VOCA / 上野の森美術館 (東京都台東区)

SNAC ZOU-NO-HANA vol.7 スナック “ピンポン” ゾウノハナ 象の鼻テラス(神奈川県横浜市)

個展 Outlaw / 遊工房アートスペース (東京都杉並区)  
代官山インスタレーション (東京都)  
オープンスタジオ / ハンマーヘッドスタジオ (神奈川県横浜市)

アーティスト イン レジデンス

2001 帆布展 / 広島県尾道市百島  
2002 ニュータウンアートタウン展 (岡山県赤磐市 山陽団地)  
2005 BankART Studio NYK (神奈川県横浜市)  
2006 Duende Studio(オランダ ロッテルダム)  
2008 Kunstlerhaus Vorwerkstift (ドイツ ハンブルク)  
2011 Tidepaussi (オウル フィンランド)  
2012 Berlin(ドイツ ベルリン)  
2014 Santa Fe art institute (アメリカ サンタフェ)  
Open-A i r Pilsen 2015 (チェコ共和国 プルゼニ市)  
2015 アーティスト イン レジデンス in 国立天文台野辺山 (国立天文台野辺山宇宙電波観測所 長野県)

作品キャプション

《わたしのわからないこと：宇宙編》 2015 年

《行方と彼方》 2015 年

“認識の果ての空、未知で広大な自然観測”

“わたしたちの背景”をはかること。宇宙は自然領域の延長線上にある。それはふだん認識しえない次元を、どうやって計測していくのかということでもある。

山ノ内町の小学校で行なわれた「わたしのわからないこと：宇宙編」というワークショップは、そこを起点としてはじまる。

眼には見えない背景、空間というものは、どのように認識され、変容し、可視化されてゆくのか——その行方、彼方を追うことが、わたしたちが“移動すること”であり、そのような“距離”をよむことが、スケールをはかることになるのかもしれない。

プロフィール

1969 年長野県生まれ。1992 年東京造形大学デザイン学科 映像コース卒業。移動と距離、スケールを軸に、絵画から写真、インスタレーションへ展開しながら“見ること”の距離間を描く。おもな活動にコミッションワークとして 2008 年にオープンした十和田市現代美術館（青森）に《あっちとこっちとそっち》と題した作品をエレベーター内、展示室と展示室の間に点在させる。2013 年にオープンしたアーツ前橋（群馬）に《ちいさなおとしもの》含む 3 点を美術館内外に点在させる。

主な展覧会：2010 年「知覚の扉」豊田市美術館及び喜楽亭（愛知）、2011 年「風景をつくる」ZELLWEGERPARK（スイス：Uster）、2012 年「日常の寓話性」、2013 年「糸を分ける」、2015 年「-0+」Gallery COEXIST-TOKYO（東京）のキュレーション+展示など。その他、2014 年 Art Project「songs of pigeon」在日スイス大使館をはじめ、東京都内、各所の展示に参加。近年では点という対象があって周縁が想起されるように、私たちが物語る背後から、背景に視点—観点を動かし、“私”をフィードバックさせることで、スケール感や奥行きが描かれる、そんな空間の構造を研究している。

大西 浩次

## 作品キャプション

《NOBEYAMA “L”&“R”》 (2015年)

《野辺山、幽玄の月》 (2015年)

私が星空を見上げるとき、いつも、星と星の間の何も見えない世界を想像する。この何も見えてない世界にも「確かに存在するもの」がある。私たちが、視覚として感知できるのは、可視光と呼ばれる波長400nmから780nmの範囲に含まれる光子(photon)である。この範囲の外にも膨大な光(電磁波)がある。ただ、地球という環境で進化した人間の目では、これらを知覚することはできないのだ。星の卵である分子雲や、星が死んだあとのガスやダストたちの出す、弱くて波長の長い光たち(電波)を検出するために、人が考え作り上げてきた電波望遠鏡たちが、空を眺めている。いま、この望遠鏡の眺める宇宙の深さを想像しながら星空を写し取る。宇宙に対する思いの深さは天文学者もアーティストもおなじであろう。

これらの作品は、アーティスト・イン・レジデンス IN 野辺山のアドバイザーとして、国立天文台野辺山宇宙電波観測所に滞在した2015年5月25日から5月28日の間に、観測所内で撮影した作品である。

「NOBEYAMA “L”&“R”」(2015)は、野辺山宇宙電波観測所のミリ波干渉計10m電波望遠鏡たちだ。”R”の一番奥の天頂を向いている望遠鏡以外は、チリのアルマ観測所が完成したあと、深い眠りについている。”L”は月明かりを集めて輝いている。はたして、彼らは夢を見ているのだろうか。「野辺山、幽玄の月」(2015)は、観測内で見上げた雲間の月である。明るい月が雲に隠れ周りの雲を輝かせている。電波望遠鏡が眺めているはるか遠き分子雲を彷彿させる、地球表面の水蒸気「雲」の不思議な形が存在していた。私が星空を見上げるとき、いつも、はるか遠き宇宙の深さを想像する。確かに、私の目にも宇宙の誕生とも言うべき、ビックバンからの光が飛び込んでくる。ただ、あまりにも弱いので、私の目の分子を励起することができないだけだ。ただ、想像力がこの少なさを補っている。そう、この何も見えてない世界にも「確かに存在するもの」がある。

## プロフィール

理学博士・星景写真家

1962年 富山県黒部市生まれ、長野県長野市在住

1988年 小笠原沖にて皆既日食を撮影、星景写真を開始

1992年 理学博士(ブラックホールの熱力学の研究)

2002年 国立天文台 客員助教授(重力レンズ)

2006年 日本星景写真協会設立

2010年 国立天文台「はやぶさ」大気圏再突入観測隊として分光観測実施

2012年 日本天文協議会「2012年金環日食日本委員会」副委員長

2014年 日本天文協議会「太陽系外惑星命名WG」委員ほか

## 主な個展

「時空の地平線」(ライフパーク倉敷科学センターほか、2009年～)、「時空の彩(いろ)」(明石市立天文科学館ほか、2011年～)、「天空の記」(府中郷土の森博物館、2013年～)、「時空の回廊」(志賀高原ロマ

ン美術館、2014年)、「天空の樹」(田淵行男記念館、2015年)、「時空の断章」(2015)、「風のいろ・清められた夜」(2015)

#### 主な賞歴

2013年 第4回田淵行男賞写真作品公募受賞

2009年 IYA2009 Galilean Nights(世界天文年2009)天体写真コンテスト3位

1999年 第3回「AMATRAS展」石原慎太郎賞

現在：博士(理学)、長野工業高等専門学校一般科教授、日本星景写真協会副会長、国際天文学連合(IAU)会員、日本天文学会天文教育委員・ジュニアセッション実行委員長、天文教育普及研究会、日本天文協議会運営委員 ほか



小阪 淳

## 作品キャプション 《宇宙図》 2015 年

この「宇宙図」は、科学普及広報財団からポスターとして発行されている宇宙図 2013 年度版および太陽系図 2014 年度版をもとに再編集し、新たな情報を加えたものとなっています。

ポスター版との最も大きな違いは、横に大きく広がっている点です。

私たちの住む宇宙は、現在どれぐらいの広がりを持っているのか

いまだ全くわかりません。しかし、インフレーション宇宙論を前提とすると

この宇宙が、ポスター版で描かれた広さよりもはるかに広がった宇宙を想定しなければなりません。

この図でも、その広がりを表すには小さすぎると思われるのですが、

「私たちがいかに宇宙を知らないか」を感じてもらうことはできるかもしれません。

### プロフィール

デザイナー・美術家

大阪大学工学部建築学科卒業。東京芸術大学大学院美術研究科建築専攻修了。一級建築士。

1994—2000 年 SF マガジン(早川書房)装画担当。グレッグーガン「ディアスポラ」(早川書房)等、SF 文学の装画を手がける。

2004—2014 年 沖縄県ワンダーミュージアムにインタラクティブ作品「動くつみき」を常設展示。

2006 年 Sony ExploraScience(北京)に 4 作品常設。文部科学省「一家に一枚宇宙図 2007」制作に参加。

2007 年 カンヌ国際広告祭 2007 Cyber Lions 銅賞受賞(受賞作品「4D2U ナビゲータ」)。

2010 年 東京書籍「宇宙に恋する 10 のレッスン」出版(共著)。

2011 年 高岡市市場再開発プロポーザル。

2000 年— 朝日新聞にビジュアル連載。同年東京都写真美術館「映像をめぐる冒険 vol.4 見えない世界のみつめ方」参加、展示作品「VIT2.0」が收藏される。

2013 年 国立天文台「宇宙図 2013」制作に参加。

2014 年 国立天文台「太陽系図 2014」制作に参加。

2015 年 「光図 2015」制作に参加。同年より「宇宙図@オンライン」制作。早稲田大学非常勤講師。

<http://www.jun.com/>

榊原澄人

## 作品キャプション

### É IN MOTION シリーズ

Webomalogy / Native Dancer / Blackboard

過去の作品から一貫して注目してきたアニメーションにおける技法、「変化」「ループ」「原画・動画」をコンセプト的に解釈、落とし込んだ作品集「É IN MOTION シリーズ」は、作家自身の主要なモチーフとして扱ってきた、「記憶／時間／物語性／神話／天体／言語／論理／反復と差異／遊牧／未分化／リズム構造／複雑系／原始絵画」等のテーマを引き続き発展させた作品群である。

Webomalogy 『ウェボマ族の神話』

ネット空間に散らばる無数の「存在しないページ」。ウェボマ族の神話はそれら到達しえないページ (ZONE) によって構成される星座の物語、世界の原始を語る創世記である。

Native Dancer 反復と差異、秩序と混沌の舞い。

Blackboard とある晩に森の声を聞きながら一人ウェボマ神話の宇宙観をレクチャーしたもの。

## プロフィール

1980 年生まれ。北海道浦幌町出身。長野県在住。幼少を北海道十勝で過ごす。15 歳で渡英後、文化庁海外派遣生を経て、Royal College of Art (英国王立芸術大学院大学) / MA Animation 科を卒業。

## 学歴

1998 London Institute (Gamberwell College of Art) : ファウンデーション課程修了

2002 Kingston University : アニメーション科学士課程終了

2004 Royal College of Art (英国王立芸術大学院) : アニメーション科博士課程修了

## 主な賞歴

平成 17 年度文化庁メディア芸術祭アニメーション部門大賞 (2006)

英国アカデミー賞短編アニメーション部門・ノミネート (2006)

国際漫画・アニメフェスティバルグランプリ (2006)

英国アニメックス学生アニメーションフェスティバル大賞 (2005)

デジタルアートアワード大賞 (2005)

ロイヤル・テレビジョン・ソサエティー賞 : 学生アニメーション部門英国全国大会一位

## É IN MOTION NO.2:

Best Experimental Animation Film : MONSTRA 2015 Short Film Competition, Portugal

Best short film in international competition : Animatou 2014, Switzerland

Bronze Pegasus : Animator Festival 2014, Poland                      ほか多数

\* 主な展覧会

2009: Incidental Affairs (サントリーミュージアム天保山/大阪)

2013: Restart (Gallery YUKI-SIS/東京)

2013: Media Art Festival (東京ミッドタウン/東京)

2013: Domani 明日展 (国立新美術館/東京)

ほか多数

早川 和明

作品キャプション 《ダイナミズム》 2015 年

私たちが見えない、知らないところで、たくさんの種類の渦が存在しています。ガラスの中でつくられる渦もいろんな渦の力があわさってできています。私が行うバーナーワークでのつくりかたは、ガラス棒の左右の回転の速度に変化をもたせ渦をつくりながら引っ張っていく（中の模様はひっぱられた方に吸い込まれて行く）方法です。絶えず動き続けている流れのなかで生まれる渦やエネルギーの法則が自分の手のなかでも成り立っていることは驚きであるとともに、銀河をはじめとした渦構造に通じていく神秘をも体感させられます。

プロフィール

ガラス作家

1983 年 長野県出身

2006 年 石岡大和氏（INORI GLASS）に師事

長野市篠ノ井にて自身の工房「Sow GLASS」を設立

賞歴

2011 年 第 31 回長野県工芸展 入選 北澤美術館選抜

2010 年 第 30 回長野県工芸展 第 30 回記念審査委員賞受賞

2008 年 BAUry アクセサリー&クラフトデザインコンテスト クラフト部門賞受賞

主な展覧会

2007～2014 年 個展 Sow GLASS 展 ～宇宙散歩～（珈琲倶楽部 寛／長野）

2013 年 個展 ダイナミック・スペース 早川和明 ガラス展（志賀高原ロマン美術館）

2012 年 個展 早川和明 タカラモノ タカラコト（うつろいの間 碧／長野）

2011 年 バーナーワークの世界展（Gallery Tanaka／東京）

2009 年 個展 Sow GLASS ガラスの中の宇宙展（八木酒舗 蔵ギャラリー／新潟）

2015 年 安曇野アートヒルズミュージアムにて個展開催（9 月）、ハンブルグ美術工芸博物館（Museum für Kunst und Gewerbe Hamburg）にて MKG-Messe Kunst und Handwerk（11 月）に出展予定。

<http://www.kazuakihayakawa.com>

松田朕佳

## 作品キャプション

《Sucking Up Milky Way (天の川を吸い上げる)》

《段ボール星》

《双児の土星》

《ワニの目》

《夜行性のフライト》 2015年

## 星空の構造—太陽の光は星の光

星の光は星が出している為に暗闇の中に光るのでしょうか、それとも暗闇が縁取る為に光るのでしょうか。ネガティブとポジティブ、規定するものと規定されるものは主観によって変化するようです。様々な生活環境から生まれた各地の神話や宇宙観は生活様式の変化に伴い更新又は変化してきました。観測と哲学は常に主観の現在を反映するもので、立ち位置を明確にする作業のように思います。しかし主観は複数でしかも動き回るため、この行為には終わりがありません。なぜなら次々に生まれてくる生命には二つずつ目がついているのですから。宇宙観はそれぞれの状況；自然、政治、経済などに応じて今後変わっていくことでしょう。ボルヘスのエッセー「ジョン・ウィルキンズの分析言語」の中で古代中国の百科事典にある動物分類法について次のようにあります。

(a) 皇帝に属するもの、(b) バルサム香で防腐処理したもの、(c) 訓練されたもの、(d) 乳離れしていない仔豚、(e) 人魚、(f) 架空のもの、(g) はぐれ犬、(h) 上記の分類に含まれているもの、(i) 狂ったように震えているもの、(j) 数え切れないもの、(k) ラクダの毛で作ったきわめて細い筆で描かれたもの、(l) など、(m) つぼを壊したばかりのもの、(n) 遠くからだどハエのように見えるもの。

分類というのが主観的で主観と対象物の距離を象徴するものだということが伺えます。遠くからだど星の光のように見えるものも望遠鏡を使って近づけばユニークな個体として名前をつけるでしょうし、太陽のように私たちにとって存在感の大きな星の光もまた、一つの小さな星の光なのです。

## プロフィール

1983年生まれ。信濃町在住。2006年にニュージーランド、Nelson Marlborough Institute of TechnologyよりBachelor of Art取得。2010年にアメリカ、アリゾナ大学大学院Master of Fine Arts修了後、ニューメキシコ州Border Art Residency、イリノイ州Prairie Center of Art、ベルリンAgora winter residency、バルセロナHomesession等アーティストインレジデンスをしながら日用品や日常の行為を用いたパフォーマンスや立体作品を主に制作している。主な受賞に2009年「First Place and Purchase Award」Harwood Art Center, Crossing 2009 South West Graduate Student Competition (アメリカ)、2008年「Outstanding Student Achievement in Contemporary Sculpture Award」International Sculpture Center (アメリカ)、2007年「第8回スパイラル・インデペンデント・クリエイターズ・フェスティバル審査員赤池学賞」等がある。